

『栄華物語』における藤原生子: 描写の意義に関連して

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 由記 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6084 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『栄花物語』における藤原生子

——描写の意義に関連して——

高 橋 由 記

はじめに

『栄花物語』は、歴史が定まってから前代を振り返って記述した歴史物語である。当然のことだが、記される逸話・人物像には後代からみた要素が多分に含まれる。その最たる例が藤原道長だろう。たとえば、撰政男とはいえ、二人の同母兄（道隆・道兼）のいる道長を、源倫子の母藤原穆子は「ただこの君を婿にて見ざらん。時々物見などに出て見るに、この君ただならず見ゆる君なり」（①150頁）¹と、卓抜した将来性を見抜いて婿に迎えたというし、伊周・隆家兄弟左遷後、後盾をなくした中宮定子の参内に、道長はしかるべき手配をしたという。こうした記述が史実か否かはさておき、後代からみた評価の高い人物や歴史的勝者に対する記述は、ある程度の誇張や脚色が加えられ、質・量ともに敗者の記述を上回る。

また、原資料の筆者あるいは編者との近さも記述の質・量に関わる。たとえば後一条天皇第一皇女皇子内親王（母は中宮威子）は、『栄花物語』続編に多くの記事が残る。皇子内親王は後冷泉天皇の中宮となったのち、女性では四人目の院号宣下を受けて二条院と呼ばれたが、後代からみた評価はそれほど高くはない。それまでの三人の女院がいずれも国母だっ

た(詮子・彰子・禎子内親王)のに対し、非国母からの院号宣下だったため、「母后として女院となった初期三人の女院は吉例で、四・五例目の二条院・郁芳門院は不吉の例であるという認識は、貴族社会の中での常識となっていた」という。そうした章子内親王関連の記事が『栄花物語』続編に多いのは、続編が「章子家女房の資料を中心軸になされてきた」³⁾からと考えられる。つまり、原資料の筆者が章子内親王方の人物だったため、章子内親王の記述は必然的に多くなった。

そうした中、後代からみた評価が抜群に高いわけでもなく、歴史的勝者でもなく、また原資料の筆者(あるいは編者)に近いわけでもないように思われながら、『栄花物語』に比較的多くの記述を残すのが藤原教通の長女生子である。

藤原生子(長和三年(一〇一四)〜治暦四年(一〇六八)、五十五歳)は藤原公任女を母に持つ教通女で、父教通はもちろん、祖父公任や伯父定頼に将来を嘱望されていた。中宮姫子没後に後朱雀天皇の後宮に入り、君寵は厚かったものの、立后が叶わず、『栄花物語』では悲劇の女性として描かれている。小論では、生子が何故『栄花物語』に多く記されるのか、生子描写の意義を考察したい。⁵⁾

一 誕生から着袴まで

生子の誕生は『栄花物語』巻十二「たまのむらぎく」に記され、その産養は公任家(三夜)・大殿道長(五夜)・大宮彰子(七夜)が行い、中宮妍子・尚侍威子さらに四条宮遵子からも祝いの品が届けられた。以降、着袴・着裳と、その成長が点描される。『栄花物語』において、誕生・産養・着袴・着裳の全てを記された道長女はおらず、『栄花物語』が生子の成長に注意を払っていたことがわかる。百日の祝いは『小右記』に「過差殊甚」と記され、豪華なものであったらしい。巻十四「あさみどり」には着袴が描かれる。

かくて霜月になりぬ。左大将殿(二教通)の大姫君は五つ、小姫君は三つにならせたまひにければ、御袴着せてま

つらせたまふ。京極殿に渡らせたまひて、西の対にのみじうしつらひめさせたまへり。殿の御前（＝道長）腰は結ひたてまつらせたまふ。時なりて殿渡らせたまへり。大姫君を見たてまつらせたまへば、御髪背中なかばかりにて、いみじくけだかくうつくしくおはします。小姫君は御髪振分にて、御顔つきらうたげに、うつくしう見たてまつらせたまふ。大姫君は、「父も母も、誰も誰もわれをのみこそ思うたまへれ、小姫君をば思ひたまはぬぞかし」と聞えたまへば、「などさはあるにか、かばかりうつくしき人を」とぞ思ひのたまはせける。(2)157頁)

生子の袴腰は道長が結び、真子の袴腰は頼通が結んだ。⁷⁾二女真子は『栄花物語』ではここで初めて登場し、誕生は描かれていない。なおかつ、「父も母も、誰も誰もわれをのみこそ思うたまへれ、小姫君をば思ひたまはぬぞかし」と、すでに真子とは異なる扱いを受けていることが記される。教通家の長女として、五歳にして父母や外祖父公任から多大の期待をかけられ、本人もそれを自覚していたといえよう。なお、生子は同月、御匣殿別当になったが、着裳前の任官を實資に批判されている。⁸⁾五歳の生子が実際の職掌に携われるはずもなく、御匣殿別当を経て女御となった藤原道兼女尊子や、特に藤原道長女威子の例に倣ったと考えられる。⁹⁾

二 母の死

さて、『栄花物語』で生子の記述が集中する最初の巻は、卷二十一「後くゐの大将」である。万寿元年（一〇二四）正月六日、前年末に男児（＝静寛）を出産したばかりの生子母の教通室（＝公任女）が没した。生子十一歳のことである。¹⁰⁾

あはれにゆゆしう思すにつけても、殿（＝教通）も大納言殿（＝公任）も、え見たてまつらせたまはず、いとあさましう声どもささげてののしり泣かせたまふもいみじきに、御匣殿（＝生子）は十一なり、姫君（＝真子）は九つばかり、ただこの二所ものの心知らせたまへるさまに言ひつづけ泣きたまふ。こと君達は遊びいさかひなどせさせたまふ、

あはれに心憂し。(②382頁)

「こと君達」は、教通室所生の、生子と真子以外の子女のことで、信家(七歳)・通基(四歳)・歛子(四歳)・信長(三歳)を指す。母の死を理解する生子と真子が他の弟妹と区別して描かれたと思われるが、教通にとつても祖父公任にとつて特別な存在と記されるのは生子である。

〔教通室が〕世におはしながらへたまはましかば、御匣殿人並々におはしまさましかば、いかにめでたき御有様ならましなど思さるるに、何ごともし残させたまふべきやうもなし。(②387頁)

教通室の葬送に際しても、「御匣殿人並々におはしまさましかば、いかにめでたき御有様ならまし」と、生子の将来が引き合いに出されている。教通室の四十九日法要の際にも、

御匣殿、御年はいと若けれど、御心深くよろづを思したるほども、いとあはれに、行く末推しはかられさせたまひて見えさせたまふ。それにつけても殿は、いとどおろかならずこそは思ひきこえさせたまふめれ。(②389頁)

とあり、生子の資質が特筆され、将来を期待させる。そして教通室の死に関する記事は生子の描写に収集されていく。同年五月五日には

五月五日、童女の薬玉つけたるを御覧じて、内大臣殿の御匣殿、

年ごとのあやめの草にひきかへて涙のかかるわが袂かな(卷二十二「とりのまひ」②410頁)

と、生子の和歌を載せる。一月に母を亡くしたばかりの少女の歌としては格別の出来だろう。『栄花物語』は教通家・公任家の悲しみを生子の歌によって描き出している。公任を祖父に持ち、教通家の期待を一身に背負っていた生子の才知に、周囲は関心を払っていたといえよう。同様に、卷二十三「こまくらべの行幸」巻末では

かくて十二月の二十九日は、内大臣殿の上の御果て、法興院にてせさせたまふ。このたびばかりと思しめしたる御有様思ひやるべし。かくて御衣の色かはるをりに、内大臣殿の御匣殿、

今はとて形見の衣ぬぎかへて色かはるべき心地こそせね¹³

とのたまはする。大殿も大納言殿もいみじう泣かせたまふ、ことわりなりや。(② 436頁)

と記す。卷二十一から描かれた教通室の死と法事を締めくくる記事に、『栄花物語』編者は生子の歌を選んだ。『栄花物語』にみる生子の役割の一つとして、教通家の代表あるいは代弁者として存在を挙げることが出来よう。

三 祖父公任の出家

生子の描写が集中する二番目の巻は、公任の出家を描く卷二十七「ころものたま」である。二人の娘(次女と教通室)を相次いで喪い、厭世観が強まった公任は出家を決意し、教通家を訪問する。生子の「人のいとやむごとなくともてなしかしづき据ゑたてまつりたまへれば、小さなながら家の君にておはする」(③ 43頁)姿を見て涙を流し、人々とそれとなく別れを惜しだ公任は、十二月に長谷に籠もり、翌年正月に出家した。驚いた教通は長谷に駆けつけ「他人どもの御事は聞えず、御匣殿のとかうの御有様を思し捨てつるなん、いみじう心憂くはべる」(⑤ 50頁)と、生子の行く末を見ずに出家した公任を責める。公任にとつても、教通にとつても、生子の将来は希望であった。さらに、長谷の公任のもとを訪れた斉信は互いに愛娘を喪つたことを嘆くが、そのなかで生子を「御匣殿など、今日明日の女御、后」(③ 54頁)と評する。一条朝最高の文化人公任を祖父に持ち、内大臣教通の長女であり、教養豊かな生子の入内(そして立后)は、他者からみてないわけではなかったということだろう。

そして長く続いた公任出家にまつわる話は次の公任と生子の歌で幕を閉じる。

雨の降るころ、長谷より、「鶯の雨にぬれて鳴くを、御匣殿に御覽せさせばや」とて、

思ひやる人もあらしを鶯のなど春雨にそぼちては鳴く

とて尼上の方（＝公任室）に聞えたまへれば、尼上、御匣殿の御方にこれを奉りたまへれば、御匣殿、

見る人を思ひすてつつ鶯の入りし山べにいかで鳴くらん（③57頁）

教通室の死と法事の話題が生子の詠歌で閉じられたのと同様に、教通家周辺の話題は生子の歌で終結する。

正編における生子描写の最後は卷二十七末近くの「今年は内大臣殿の御裳着、内参りなどぞ、世には聞えさずめる」（③76頁）である。「今年」は万寿三年（一〇二六）で生子十三歳である。生子の着裳がいつだったのか、資料では確認できないが、着裳後に後宮に入る可能性は噂されていたのだろう。

『栄花物語』正編において生子はいまだ着裳前でありながら、資質が優れていることや、入内（さらには立后）が期待されていることが記される。倉田実氏は「（生子が）入内したのは長暦三（一〇三九）年、『栄花物語』正編成立は通説で長元三（一〇三〇）年なので、ここは生子入内を知らないでその資質を語っている。それだけ生子の資質は優れていた」とする。¹⁴『栄花物語』正編（卷一～三十）の成立は、卷三十に描かれた道長没（＝万寿四年（一〇二七））から数年後の長元年間（一〇二八～一〇三六）といわれるから、正編成立時において生子の行く末は未定であった。あるいは入内しないかもしれない生子に対し、まるで予告のように将来が語られるのは、貴族社会において生子の入内が充分可能性のあるものと考えられていたからだと思われる。『栄花物語』正編における生子描写は、後代からみた評価ではなく、歴史物語においては数少ないが、当代評価・注目度の高さを反映しているといえよう。

四 伊勢の託宣と入内

生子描写、ひいては生子の生涯の大きな山場となっているのが、卷三十四「暮まつほし」である。教通や後一条天皇も望んだという生子の後一条天皇への入内は実現せず、生子入内の話が具体化するのには、後朱雀朝（長暦三年（一〇三九））

であった。後朱雀天皇は、上東門院彰子所生の一条天皇第三皇子で、東宮時代には尚侍嬉子が親仁親王（のちの後冷泉天皇）を産んで没し、その後、禎子内親王が尊仁親王（のちの後三条天皇）と二人の内親王（良子内親王・娟子内親王）を産んでいる。即位後、頼通養女の嫡子が入内し、禎子内親王（皇后）、嫡子（中宮）と相次いで立后したのち、嫡子が長暦二年（一〇三八）に祐子内親王を産んだ。翌年、嫡子の再度の懐妊が語られ、続いて伊勢の託宣によって、急展開で生子の入内が実現化する。

そのころ伊勢の託宣などいひて、「藤氏の後おはしまさぬ、悪しきことなり」とて、内の大殿の御匣殿、参らせたまふべしといふこと出で来て、七月ついたちごろといそがせたまふほどに、六月二十七日内裏焼けぬ。(③303頁)

当時、后位にあつたのは禎子内親王（皇后）と嫡子（中宮）だけである。禎子内親王は三条天皇の皇女であり、嫡子は頼通養女ではあるものの実父は敦康親王だから、藤原氏出身とはいえない¹⁶。そのため、藤原氏出身の后が必要だというのだろう。仮にこの時、藤原氏出身の后として、生子が立后することになれば、皇后（禎子内親王）と中宮（嫡子）に続いての後朱雀天皇にとって三人目の妻后となるから、妻后が三人並立することになる。前例のない一帝三后があり得たのかは別問題として、藤原生子の入内は立后が前提であった。

長暦三年（一〇三九）七月上旬と予定された入内は、六月二十七日の内裏焼亡によって延期となったが、八月に中宮嫡子が祿子内親王を産んで没した後、十二月に生子は入内した。

はかなく月日も過ぎて、内の大殿の御匣殿、十二月に参らせたまふ。宮（＝嫡子）の御事のほどなきになど、殿（＝頼通）は思しめしたり。今年ぞ二十六にならせたまひける。年ごろいつしかと思しめしける御事にて、殿（＝教通）、御心を尽させたまへり。内の大殿の上は、三条院の女二の宮（＝禊子内親王）、このたびは添ひたてまつらせたまへり。新しく人なども参らず、ありつき目やすし。京極殿に参らせたまへり。いと愛敬づき気高くをかしげに、御髪なごめでたくおはしましけり。おぼえありてさぶらはせたまふ。殿片時まかでさせたまはず、あはれに添ひさぶらはせ

姫子没後まだ日も浅く、頼通が生子入内を不快に思ったらしいことは『春記』に記される¹⁷⁾。とはいえ、姫子の死によって後朱雀天皇の妻后は皇后禊子内親王ひとりになったから、仮に生子が立后しても、前例に適う一帝二后(妻后並立)に留まる。神託は藤原氏の后を望んでおり、生子立后の可能性はあり得ないわけではなかったのではなからうか。入内後の生子は君寵厚く、何度も「おぼえありて」と記される。なお、『栄花物語』における後朱雀朝の後宮の描写は当初非常に簡素で、たとえば、中宮姫子は関白頼通養女として入内したにも拘らず、長暦元年(一〇三七)正月の入内から、立后(三月)↓懐妊↓出産(長暦二年(一〇三八)四月)↓再びの懐妊↓出産と死(長暦三年(一〇三九)八月)といった事実が単に羅列されているに過ぎないといってもよい。後朱雀朝の後宮の描写が急増するのは生子入内以降である。それはつまり長暦元年(一〇三七)十二月に章子内親王が東宮妃として内裏に入つて以降に重なる。『栄花物語』の原資料は章子内親王方の人物が関わりとされるが、そこに、生子描写が多かつたのは、それだけ生子に対する章子内親王方(あるいは貴族社会)の関心が強かつたことを物語るといえよう。

五 延子入内と生子の和歌

藤原氏の后を望まれて生子が入内してから二年半ほど経た長久三年(一〇四二)三月、藤原頼宗女の延子が入内した。『栄花物語』は続いて同年四月の祐子・裸子内親王の参内を記すが、次に、月日を遡らせて、後朱雀天皇と生子の贈答を載せる。

まことや、梅壺の御方に、この春、上より、

春雨の降りしくころは青柳のいと乱れつつ人ぞ恋しき

と申させたまへれば、

青柳のいと乱れたるこのごろは一筋にしも思ひよられず
と聞えさせたまへり。御返り、

青柳の糸はかたがたなびくとも思ひそめてん色は変らず

また、御返り、

浅緑深くもあらぬ青柳は色変らじといかが頼まん

と聞えさせたまひけり。(③309～310頁)

この四首の贈答は、『新古今集』巻十四・恋四に「麗景殿女御まりてのち、雨降り侍りける日、梅壺女御に」(一二五〇番歌)・「御返し」(一二五一番歌)・「又つかはしける」(一二五二番歌)・「御返し」(一二五三番歌)の詞書で入集している。¹⁸⁾後朱雀天皇の贈歌「かたがたなびくとも思ひそめてん色は変らず」は、別の女性の存在を記しながらも生子への愛情の変わらないことを詠んでいる。『栄花物語』は延子入内に際し、後朱雀天皇と延子との贈答ではなく、後朱雀天皇と生子との贈答を記している。「まことや」は、「話題を転じるときや、話の途中でひよいと思ひ当たったことを言い出したりする時、念を押す気持を込めて用いる語(『日本国語大辞典』)であり、生子関連の歌は、時間を遡っても記すに値するものだった。同様に、話の流れから転じた生子関連の贈答を、年時を遡って記している例がある。前掲の後朱雀天皇と生子との贈答に続いて『栄花物語』は同長久三年(一〇四二)十二月の内裏焼亡を記した後、「まことや」と断って、公任から生子への贈歌と、後朱雀天皇の返歌を記す。

まことや、二条殿におはしましたし時に、鵜の魚を食ひてさぶらひけるを、入道の大納言(公任)聞きたまひて、女御殿の御方に、鵜の魚を食ひてさぶらひけることなど書きたまひて、

いかでかはうはの空には知りにはけんかくめ見ゆるに世にあへりとは

上渡らせたまひて、御覧じて、

祈りつつゆるぶる網のしるしには飛ぶ鳥さへもかかるとぞ見る。

これを聞きたまひて、また大納言ぞ申したまひける。(歌、欠)(③311頁)

「二条殿」は教通邸の小二条殿のことである。生子の実家が里内裏となつた折に、公任が生子に贈歌したわけだが、公任は長久二年(一〇四一)正月一日に没しており、この記事は明らかに年時を遡っている。史実によれば、後朱雀天皇が二条殿を里内裏としたのは長久元年(一〇四〇)十月二十二日(19)から翌年十二月十九日(20)までで、公任存命中という条件を加えれば、詠歌時は二か月あまりに限定される。生子への贈歌は公任最晩年のもので、出家後も生子のことを案じていた公任の様子が知られる。なお、二条殿が里内裏だつたところに弘徽殿に住していた生子が催したのが、長久二年(一〇四一)「弘徽殿女御生子歌合」である。『采花物語』には当該歌合の記載は一切ないが、斎藤熙子氏は「歌人、判者ともに実力者をそろえ、公任孫女で、和歌に造詣深い女御にふさわしい催し」(『新編国歌大観』第5巻 解題)とする。

六 後朱雀天皇の病と立后問題

入内から六年、生子への君寵は厚かつたが、「梅壺の女御殿の御おぼえ、月日に添へていとめでたく世人は申せど、いかなるにか、后にはえみたまふまじとのみ申す」(卷三十四「暮まつほし」、③315頁)と、立後の難しいことが噂されるようになったという。そして卷三十六「根あはせ」では、病が重くなつた後朱雀天皇と、その女御たちの有様が描かれる。

内の大殿、女御の御事を思すにもいみじ。年ごろも后に立たせたまはんことを思しつるに、この際はましていかにいかにもと思しめす。大将殿(≡頼宗)も、女御(≡延子)のただならずおはしませば、いかがは口惜しう思されざらん。日ごろのふるまふまにいと堪へがたげにおはしませば、心を尽したまふ人多かり。内の大殿は、後の御事をいみじく申

させたまふ。御心にもいみじういとほしう思しめしながら、難げなる御気色なり。院（＝上東門院）にもいみじう申させたまふ。

正月十日のほど、いみじう重くならせたまひぬれば、内の大殿の女御まかさせたまふを聞しめして、藏人長宗召して、臥させたまひながら御文書かせたまひて奉らせたまふ。いみじうあはれなり。「今しばしのほどを、近くて聞き果てさせたまはで」などやうに聞えさせたまひけるにぞ、とまらせたまひぬる。ただの人は添ひていかなるまでも見ることなるを、いかなることにか、みな出でさせたまふべしと聞ゆるは。皇后宮（＝禎子内親王）、「上らせたまひて見たてまつらせたまはん」と申させたまへど、「こと人々もいかが思はん」と仰せられて、上せたてまつらせたまはず。重くならせたまふままに、内の大殿は、女御の御事をいみじう申させたまふ。いかならんと殿の人も思ひ騒ぎたり。二の宮（＝尊仁親王）も入らせたまふ。人に抱かれさせたまひて、屈じたるやうにておはしますもいとあはれなり。

十四日に、齋宮（＝良子内親王）准三宮の宣旨下り、年官年爵賜はらせたまふ。この折にやと世の人思ひ申したりつる梅壺の御事、さもあらずなりぬれば、いみじう思し嘆かせたまふ。③ 332～334頁

生子が宮中を退出しようとするのを留めるのに対し、禎子内親王の参内を断つたのは、対照的である。生子への君寵はそれほど深かったのだろうが、立后の沙汰はないまま、後朱雀天皇は崩じた。

そもそも、生子入内は藤原氏の後の必要性から実現化したものであった。当時、后位には禎子内親王（皇后）しかおらず、次期天皇である東宮親仁親王の妃が章子内親王であることを考え合わせても、藤原氏の後が必要ならば、君寵厚い女御生子（内大臣教通女）あるいは懐妊中の女御延子（権大納言頼宗女）のどちらかの立后の可能性が、後朱雀天皇病臥の折、取りざたされるのも当然であった。おそらく、当時の貴族社会における最大の関心事は、後朱雀天皇の病と立后問題だったと考えられる。中でも生子は、天皇の側近くに在し、病篤い天皇が退出を留めたほどに寵厚かった。しかし「一人の御女ならぬ人の、御子おはしまさぬがならせたまふ例またなきこと」③ 333頁）ということで生子の立后は適わず、後

朱雀天皇は崩じた。生子は「内大臣殿、あまたの御なかにすぐれて思ひきこえさせたまひけれ」(③344頁)と、教通にとつて鍾愛の子女であり、教通家にとつても公任家にとつても、まさに「二葉よりことごと疑ひなく后がねとかしづききこえたまへる」(③336頁)存在であつた。幼少時から将来を期待され、才知に優れ、君寵篤く、さらに藤原氏の后を望む託宣があり、中宮位も空いていたという条件が揃いながら立后できなかった生子に対し、教通のみならず貴族社会が強い関心と同情を寄せた結果が、生子に対する多くの描写につながつたと考える。

七 その後の生子と妹歎子

後冷泉朝になり、生子の妹歎子が永承二年(一〇四七)十月、後冷泉天皇の後宮に入った。そして永承五年(一〇五〇)には関白頼通女寛子が入内し、翌年二月に立后した。その記事に続き、『栄花物語』は歎子の死産を語る。

まことや、右の大殿の女御殿(＝歎子)は、まだ皇后宮(＝寛子)も参らせたまはざりしをり、ただならずなせたまひて、中宮大夫(＝長家)の三条に出でさせたまひにしかば、殿(＝教通)もみなそこにおはしまししかば、梅壺の女御殿はひとり殿におはしまして、

ゆきかへりふる里人に身をなして一人ながむる秋の夕暮²³⁾

などひとりごたせたまふ。若宮はうせて生れさせたまへるとぞ。内(＝後冷泉天皇)にも殿にもいみじう嘆かせたまふ。(③365頁)

歎子の出産(死産)は永承四年(一〇四九)のことだから、寛子の入内・立后より二年ほど前のことである。基本的には年時順の記述をとる『栄花物語』が、「まことや」と断つて時間を遡る記事を載せるのは、先に挙げた生子関連の和歌と同様である。また、歎子の出産(死産)に関して、当の歎子や父教通の喜びや悲嘆を記すのではなく、里にひとり残る生子

の寂しさを記している。今までも確認してきたが、『栄花物語』は、積極的に生子の和歌を記している。

生子の出家は天喜元年（一〇五三）三月（四十歳）のことで、『栄花物語』にも記される（卷三十六「根あはせ」）。そして卷三十七「けぶりの後」の次の描写が、『栄花物語』における生子描写の最後である。

梅壺女御殿は、いと尊くおこなひておはします。月の傾くを御覧じて、

急がずばひかりを見てぞ嘆かまし半ば過ぎゆくわが身なりとて

御心地悩ましく思しめされけるころ、ひぐらしの鳴くに、

明日までも聞くべきものと思はねば今日ひぐらしの声ぞ悲しき²⁴

など仰せらるる、いとあはれなり。

名残なきさまに背きはてさせたまひておはしませば、いとあはれに殿は見たてまつらせたまふ。またたぐひなくいみじきものに幼くより思ひ申させたまふを、かくて見たてまつらせたまふ、いとあはれに口惜しげなり。御心地もやうやうおこたせたまへば、うれしく思しめさる。せめて長くとも、異事よりは思ひ申させたまはざりけり。わがなからむ世に、あるよりは衰へ、心細くや思されむと、うしろめたきあまりには、われより後はおはしまさでもありなんと思しめしながら、目の前にゆゆしからんことは見じと思しめさるはいかがはおはしますべからん、わりなき御心にぞ。(③403～404頁)

生子が没したのは治暦四年（一〇六八）八月二十一日、五十五歳のことである。

『栄花物語』続編の原資料となっているのが皇子内親王方の人物の関わるものであることは先に述べた。皇子内親王は後冷泉天皇中宮、つまり生子が入内した後朱雀朝においては東宮妃である。加藤静子氏は『栄花物語』の後朱雀朝の描写は「後朱雀後宮の内側に身をおくのではなく、あくまでも外側から眺めた叙述に終始している」とする²⁵。たしかに後朱雀天皇の君寵や立后問題は、東宮妃皇子内親王には直接関わらない。つまり、生子描写は生子に対する興味や注目度に直結して

いるのであり、記述されたことの意味は大きいと考える。生子は入内後も、注目度の高い人物だったといえよう。

おわりに

後代からみたとき、所生の皇子女もなく、女御のままであった生子はそれほど重要な人物とはいえない。そのことは、生子に関する説話がほとんどないことからわかる。教通女の中で説話が残っているのは、後冷泉天皇崩の数日前に立后し、のちに「小野皇太后」と呼ばれた教通三女の歎子である²⁶。しかし、公任や教通が期待し、鍾愛したのは生子だった。そのことは他資料²⁷からもうかがえる。『栄花物語』正編が成立したとき、生子は優れた資質と周囲の期待を兼ね備えた実在の人物であった。将来が未定の生子に対する貴族社会の注目度の高さが正編における生子描写につながったと考える。さらに続編においては、視点人物である章子内親王と直接的な利害関係になかったことに加え、章子内親王方の生子に対する興味・注目度の高さ、および立后できなかった悲劇性が多くの描写を残したと考える。

歴史物語は基本的には歴史が定まった後代から見た歴史を記している。そのため、当時の評価や注目度ではなく、後代の評価や注目度の高い人物・出来事が記される傾向にある。そのなかで、『栄花物語』における生子は、正編においても続編においても、当代評価・注目度が高かったがゆえに描写の多かった、数少ない人物といえよう。

- (1) 『栄花物語』は、山中裕・秋山慶・池田尚隆・福長進氏校注・訳 新編日本古典文学全集『栄花物語』①③(小学館 一九九五～一九九八年)による。丸数字は新編全集『栄花物語』における巻数、算用数字はページ数。人物は私に注をつけた。傍線及び「」内に補った主語は筆者による。
- (2) 高松百香氏「平安貴族社会における院号定——女院号の決定過程とその議論」(『女と子どもの王朝史——後宮・儀礼・縁』森話社 二〇〇七年 所収)
- (3) 加藤静子氏「一品宮皇子周辺と『栄花物語』続篇第一部(二)」(『王朝歴史物語の方法と享受』竹林舎 二〇一二年 所収)
- (4) 新編日本古典文学全集『栄花物語』の頭注では、生子について「後朱雀帝の寵愛を蒙りながらも立后がかなわないという悲劇のヒロインとしてしばしば登場した」(巻三十七「けぶりの後」、③40頁)と記す。
- (5) 生子に関する御論考としては、鈴木好枝氏「梅壺の女御」(『学苑』十四―四、一九五二年四月)、古瀬雅義氏「藤原定頼の人物像についての一考察——長暦三年の生子入内事件をめぐって——」(『国文学攷』一三〇、一九九一年六月)、嘉藤久美子氏「女御生子の文学とその生涯をめぐって」(『東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集 言語・文学・文化』一九九八年四月)、古瀬雅義氏「長久二年弘徽殿女御生子歌合がもたらしたもの——関白頼通のあせりと歌合に対する姿勢の変化——」(『狭衣物語の新研究——頼通の時代を考える』新典社 二〇〇三年 所収)がある。
- (6) 『小右記』長和三年(二〇一四)十一月二十八日条
- (7) 『御堂関白記』寛仁二年(二〇一八)十一月九日条
- (8) 『小右記』寛仁二年(二〇一八)十一月十五日条
- (9) 『二代要記』は、尊子が御匣殿別当として入内したと記す。
- (10) 威子は寛仁元年(二〇一七)十二月二十七日、御匣殿別当。翌寛仁二年三月七日入内、四月二十八日女御。
- (11) 教通室(二公任女)の没日は『栄花物語』には正月五日とあるが、『小記目録』によると正月六日。
- (12) 『小右記』治安三年(二〇二三)十二月二十七日条
- (13) 当該歌は『玉葉集』(巻十七・雑四・二三五六)に「母のはてに服ぬぐとてよみ侍りける」の詞書で作者を「女御藤原生子」として入集する。なお、勅撰集・私撰集・私家集は『新編国歌大観』(角川書店 一九八三～一九九二年)により、私に表記を改めた。

- (14) 倉田実氏「入内した養女たち——後朱雀朝の後宮——」(『王朝撰関期の養女たち』翰林書房 二〇〇四年 所収)
- (15) 内の大殿には、女三所、男四人ものせさせたまふを、大姫君御匣殿と聞ゆるを、いと参らせたまはしう思して奏せさせたまふ。内(＝後一条天皇)にもさる御心ざしありて思しめしけれど、中宮(＝威子)にはばかりまうせさせたまひて、さしはへうち出で申させたまはず。(卷三十一「殿上の花見」、③192頁)
- (16) 姫子所生の祐子内親王が長久元年(一〇四〇)十一月二十三日に准后になったことに対し、『春記』同日条には「又内密談云、藤氏皇后于今無其人、已非託宣旨、源氏皇后蒙神罰之後、以其子息忽被下准后宣旨、尤背神意歎、尤可恐々々者」とあり、姫子を「源氏皇后」と記している。なお、『春記』は『増補史料大成』(臨川書店 一九六五年)による。
- (17) 『春記』長暦三年(一〇三九)十一月二十二日条、同二十八日条、十二月二十一日条
- (18) 『新古今集』では、後朱雀天皇の贈歌は二句「降りしくころか」、生子の返歌は結句「思ひよられじ」、後朱雀天皇の贈歌は結句「色ぞ変はらじ」。
- (19) 『春記』・『扶桑略記』同日条。『百鍊抄』は十月十二日とする。
- (20) 『扶桑略記』・『公卿補任』・『十三代要略』・『百鍊抄』。ただし、『百鍊抄』は上東門院よりの遷御とする。
- (21) 『二東記』は生子の参内を長久元年(一〇四〇)十一月十日とする。また、『春記』は生子が弟通基の喪により十二月九日に山井殿に移ったと記す。生子が小二条殿にいた期間が長久元年(一〇四〇)十一月十日から十二月九日であれば、公任の生子への贈歌はこの期間になる。
- (22) 『新拾遺集』(卷四・秋上・三七九)、『万代集』(卷四・秋上・九四四)に「題知らず」で作者を「梅壺女御」として入る。
- (23) 『扶桑略記』永承四年(一〇四九)三月十四日条
- (24) 『統古今集』(卷十六・哀傷・一四一八)に「重くわづらひてのころ、ひぐらしの鳴くを聞きて」の詞書、二句「あるべき身とも」で入集する。
- (25) 注(3)と同じ
- (26) 歎子は、白河院の小野雪見御幸に際し、機知でみごとに饗応したという説話(『今鏡』『無名草子』『十訓抄』等)や、往生伝(『東斎随筆』『拾遺往生伝』)が残る。
- (27) 『公任集』や『定頼集』には生子関連の歌が残る。